

令和 6 年度 東京都立戸山高等学校学校経営報告

校 長 決 定

1 今年度の取組状況と取組目標に対する自己評価

自己評価の基準：【A】十分達成できた 【B】概ね達成できた 【C】あまり達成できなかった

(1) 学校経営・組織マネジメント

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 学校組織マネジメントを意識した学校経営 【A】	① 学年・校務分掌の業務について校内で共有し、組織的な教育活動の実践 ② 個人の力量に頼ることなく、組織として業務が遂行できるよう業務の分散化を図り、計画的な人材育成と人材配置（人事異動）の実施（属人的な業務遂行から、組織的な業務遂行への変換） ③ 客観的なデータに基づいた学校経営・校務分掌の推進 ④ 効率的な予算編成並びに執行（選択と集中） ⑤ 教職員の勤務時間の負担軽減を考慮した働き方改革の実現	① 毎朝、打合せを行い、学年・分掌で情報共有を行った。 ② 適材・適所を考慮し、教員の特性を学校経営に活かす組織的な人材配置を心掛けた。やる気のある若手に積極的に活躍の機会を与え、人材育成を図った。若手教員が積極的に動き、フランス研修が実施できた。 ③ 模擬試験や学校説明参加者等の結果を数字で示すとともに、分掌や学年に分析・対応策を指示した。 ④ SSHの予算減を反映した中・長期的予算編成を行った。 ⑤ 授業のない曜日に在宅勤務を行う教員が増えた。
イ 感染症まん延時や災害発生時における学習環境の維持に向けたスキルの修得 【B】	① 反転学習等、授業方法の改善。家庭学習や長期休業期間中におけるオンデマンド授業の実施、オンライン配信やプロジェクト等 ICT を活用した授業の実践。生徒間の情報共有による対話的学びの実践 ② ICT を活用した情報収集及び発信 ③ セキュリティ意識の向上と個人情報の漏えい防止のルール遵守	① 長期休業中の講義をオンデマンドで配信する教員が増えた。スタディサプリ利用者が生徒・教員とも減少し、来年度の契約更新は行わなかった。通常の授業でも予習を中心とした反転学習に取り組む教員が増えてきた。 ② 情報収集・発信において ICT の活用は図られている。 ③ 互いのプライバシーを尊重する意識を高める必要がある。
ウ カリキュラム・マネジメントを意識した教育	① 課題に対応し、教育目標を達成するための教育課程の検討 ② 全教科・全単元のルーブリックの作	① 総合的な探究の時間である学校設定科目「知の探究Ⅰ・Ⅱ」について改善策の検討を行った。

課程の編成 【B】	成と教科毎に評価規準を統一した観点別評価の実施 ③ 新課程の共通テストに対応した教育課程の編成 ④ 全校的視野をもつ専門家集団としてのカリキュラム委員会の実施 ⑤ 各教科の単位数・教科定数ありきではない最善の教育課程の検討	② 新学習指導要領に基づいた観点別評価は3学年まで完成した。 ③④⑤ 共通テストに対応した教育課程についてカリキュラム委員会で検討を行った。教科横断的な学習の実施状況について調査を行った結果、すでに実施している教員が少なからずいた。
エ Tokyo スマート・スクール・プロジェクトの実現 【B】	① Wi-Fi 環境の整備により ICT を最大限に活用した密度の高い授業の実践 ② Microsoft Office365 等を活用した、学校評価やアンケート集計等の実施や部活動指導員のアウトソースの活用 ③ 職員会議等の会議におけるペーパーレス化と電子起案化の推進 ④ 働き方改革により夏休完全消化、有給休暇の年間15日以上の取得	① 教材配布や連絡だけではなく、授業中の情報共有において Teams の活用が進んでいる。アンケート集計において Forms を利用する等、ICT を積極的に活用した。 ② 職員会議のペーパーレス化を実施した。電子起案率 100%は達成できなかった。 ③ 夏季休暇については、ほぼ全員が5日間取得したが、有給休暇40日中15日（取得率37%以上）取得した教職員は約6割であった。
オ 特色化を意識した教育課程の編成 【B】	① 進学指導重点校として難関国公立大学受験に対応した教育課程の編成 ② SSH 及び TM の目的を達成するための取組の開発・実践 ③ 総合的な探究の時間（人間と社会）における体験活動の充実 ④ SSH と TM と連動した STEAM 教育の検討並びに SDGs を意識した教育活動の実施 ⑤ 教科横断型「知の探究（総合的な探究の時間）」における探究活動の充実及び全校指導体制の検討	① 自由選択科目に SSH クラス対象の情報科目を設置し、共通テストで結果を出すことができた。 ② 職員会議において事業内容を周知し、SSH の行事における業務を学校全体に割振り、校内で SSH 事業に対する理解と関心が高まった。 ③ 「人間と社会」は、防災体験や TGG 体験等を実施した。 ④ SS 科と知の探究科の連携により、教科横断的 STEAM 教育の実践を図った。「知の探究Ⅱ」において SDGs をテーマとした探究活動を実施した。 ⑤ 「知の探究Ⅱ」において、年間授業計画の見直しを図った。

（２）学習活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 「東京型教育	① 板書と講義中心の受動的・一方通行	①主体的・対話的で深い学びを実践

モデルの実現」 【B】	的な授業形態から脱却し、生徒が活動する主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の実践 ② Teams や Forms 等の Office365 を活用した授業実践、及び模試のビックデータを活用した個に応じた学習指導・進路指導の実施 ③ 教育ダッシュボード、統合型校務支援システム（C4th）及び統合型学習支援サービス（0365）の活用	する教員が増えてきているが、年配の教員を中心にチョーク&トークから脱却できない教員がいる。 ② Office365 は、すべての学年、教員において活用できている。模試のデータは進学指導対策会議で定期的に学年・教科で共有した。 ③ C4th 及び 0365 は活用されている。教育ダッシュボードについては令和7年度開始とした。
イ 新学習指導要領に対応した授業展開 【B】	① 同一科目における評価規準の統一、全定期考査の共通問題化を図り、観点別評価を含めた学習評価の規準を統一する。 ② 新たな科目に対応した教材研究の充実 ③ 大学入学共通テストに対応した学校設定教科・科目の設置	① 定期考査の共通問題化について、一部の科目で実施されなかった。観点別評価についても完成年度を迎え、精度を高めた。 ② 新学習指導要領の趣旨を踏まえた教材開発を行った。 ③ 3 学年に自由選択科目「情報演習」を設置し、結果を出せた。
ウ 進学指導重点校としての学力向上に向けた組織的、継続的な取り組み 【A】	① 習熟度授業及び少人数授業、夏期講習等により個々の生徒の学力、進路希望先に合わせた学習指導の推進 ② 成績上位層に向けた授業実践と「高い志望形成」に対する個別指導（志望校を下げない指導）の充実 ③ 入学時からの学力の定点観測と「学力進路データベース」の整備により個々の生徒の状況を全教員で共有し、学力の向上と希望進路の実現 ④ 授業のプロとしての 50 分の授業における寝かせない授業、他教科学習をさせない授業の実践 ⑤ 相互授業参観期間を活用した指導教諭並びに進学指導研究生を中心とした全教科における授業研究の実施（相互授業参観年間 3 回実施） ⑥ 中間層・下位層の学力の底上げを図る。	① 英語、数学において習熟度並びに少人数授業を展開し、生徒の学力、希望進路に合わせた夏期講習、3 学期の特別授業を実施した。 ② 東大現役合格 8 名、難関国公立大学（国公立医学部等を含む）46 名の合格者を輩出できた。 ③ 進学指導対策会議を年間 13 回開催し進学指導方針・模試の分析等を教員間で共有できた。 ④ 生徒の知的好奇心を刺激し、寝かせない授業・他教科学習をさせない授業の取組を行った。 ⑤ 進学指導研究生及び教師道場生の研究授業を中心に、授業研究を実施した。 ⑥ 個別指導や課題により底上げを図った。
エ AI 時代に対応した学力の育成	① リーディングスキルテスト等の結果に基づき、すべての教科において、読解力を育成するための授業内	① 1 学年の 12 月に GPS テストを実施。その結果を進学指導対策会議により全教職員で情報を共有し

【A】	容の再構築 ② 読書活動を通じた思考力・判断力・表現力・創造力の育成 ③ スマート・スクールを意識した個人端末等の活用や Teams 等を活用した授業展開の実施	た。各教科により、スキル向上のための対策を行った。 ② 図書館司書の取組により、新刊本の紹介等、読書活動を推進した。ビブリオバトルで全国大会東京代表に選出された。 ③ 1・2 学年が個人端末を購入し、教育活動全般で生徒及び教員が Teams や Forms を活用した。
オ 英語教育推進校として 4 技能をバランスよく育成し、将来国際社会に貢献できる人材の育成 【B】	① オンライン英会話や JET の活用等により、特に「聞く」「話す」力の育成 ② 4 技能を測定する外部検定試験（GTEC 等）を 1 学年、2 学年全員に受験させ、総合的な英語力を育成 ③ JET を活用し、現代英語として適切な表現ができる力の育成とともに、理数論文等でも的確な表現ができる力の育成 ④ TGG (Tokyo Global Gateway) を活用したアウトプット場面の設定	① 1 学年を中心にオンライン英会話を実施した。 ② GTEC を 1 学年、2 学年にそれぞれ 1 回ずつ受験させ、4 技能の測定を実施し、授業改善に結びつけた。 ③ JET による指導を行い、表現力の育成に力を入れ、SSH における英語による発表に結び付けた。 ④ 1 年時にアウトプットの機会として 3 月に TGG を利用した。
カ SSH 第Ⅳ期最終年度の総括及び次期指定に向けた取組 【C】	① 学校設定科目「知の探究Ⅰ」と「知の探究Ⅱ」の円滑な接続の考慮したカリキュラムの開発 ② 科学の甲子園等のコンテストでの上位入賞、生徒の英語での研究発表回数の増加 ③ 理系女子の研究環境等に関する理解促進と理系女子交流会の開催 ④ 海外を含む研究機関や大学等との共同研究や交流、他の SSH 校との連携強化促進 ⑤ 第Ⅳ期の研究を完成させ、第Ⅴ期申	① 「知の探究Ⅰ」で学んだ、研究テーマの設定、仮説、調査・実験、検証、が地学関係に特化されており、「知の探究Ⅱ」で再度指導を行う必要があった。 ② 科学の甲子園において実技競技で第 1 位となった。 ③ SYR' s において女性研究者育成に関するキャリアパスについて理解を深めた。 ④ 海外の高校生とオンラインや対面で研究発表を実施した。

	請に向けた校内体制の整備 ⑥ SSH クラスの教育課程の保障と研究環境の維持 ⑦ 本校を志望する生徒の希望と募集対策の観点から SSH の再指定対策	⑤ SSH ワーキンググループを設置し、課題整理を行った。 ⑥⑦東京都教育委員会から支援センター特別指定校等、様々な人的支援・予算的支援を受け、従来に近い研究活動を実施できた。本校の志願者は増えたが、SSH クラス希望者は減少した。
キ 「知の探究」の充実 【B】	① SSH の研究開発で得た知見の「知の探究」への活用 ② 全校体制での探究活動の支援に向けた準備 ③ 研究発表会実施に向けた準備 ④ 「知の探究」(総合的な探究の時間)の指導力の向上	① 「知の探究」の発表会で SSH クラスの生徒がメンターを務め、一般クラスの生徒も研究の質・発表のスキルが昨年より向上した。 ② 「知の探究」担当者を中心に探究活動の共通理解を図った。 ③ 生徒を中心に発表準備を行った。 ④ 授業実施前に「知の探究」担当者が授業内容の擦り合わせを行うことはできなかった。

(3) 進路指導

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 進学指導重点校としての1学年からの系統的、組織的な進路指導 【A】	① 学習ガイダンス等による丁寧な学習指導の実施により、入学時の高い進学目標を維持させ、目標達成に向けた努力を促す。 ② ビックデータを活用した進学対策会議及び志望校検討会議等において進路部が中心となって学年及び教科が個々の生徒情報を共有し、組織的な学力向上と希望進路の実現を図る。	① 現役合格者による卒業生講話や進路ガイダンスを通じて、目標達成に向けたモチベーションの涵養をすることができた。 ② 進路部や TM 部を中心に、3 学年と連携しながら月 1 回の進学指導対策会議をとおして、模試結果の情報を共有しながら、各教科の指導へとフィードバックできた。
イ 長期休業期間中の講習参加生徒の増加 【A】	① 各教科で講習内容を検討し、進路指導部を中心に全校体制で効果的な講習を実施する。 ② 長期休業日中は、部活動、学校行事の準備と講習の両立を図るように生徒指導を行い、講習参加者の増加を目指す。 ③ 早期に長期休業日中の講習の講座数・日程等を生徒に周知し、生徒に	① オンデマンドを活用し、部活動に便宜を図る教科があった。長期休業中の講習は進路部を中心に全教員で対応し、組織的に開講した。 ② 定期的な朝学習を実施する部活があった。講習を含めて、全教職員で対応した。 ③ 教科で日程・教室の調整を行い、長期休業中における講習の充実を

	長期休業日中の学習計画の作成を促す。	図ることができた。
ウ TM の取組みにより、医学部医学科進路希望者への進路実現 【B】	① 模擬試験やクラウド等を活用し、個々の生徒の学習状況と学習成果を迅速かつ的確に把握した指導を実施する。 ② 在京の医科大学や医学系研究機関、病院等と連携し、オンラインを含めた生徒向けの講演会、見学会、体験実習等を実施し、課題研究と研究発表会を実施する。 ③ 1 学年から十分な自主学習時間を確保させ、文系科目も含めて基礎基本を取りこぼすことなく学習させる。 ④ TM に参加していない生徒も含め、医学部医学科に対する進路情報を提供し、医学部進学を支援する	① Teams 等を活用し、学習状況調査を把握し、普段の学習指導や個人面接に生かすことができた。 ② 都立病院や医科大学等による対面の実習を実施し、体験や研修内容について発表会を開催し、報告書を作成した。 ③ 模擬試験の受験だけでなく、結果に基づき、面接時に学習時間の確認・指導を行った。 ④ TMplus として、TM に参加していなかった医学部進学希望者にも門戸を広げたが、医学部志望者が減少し、国公立大医学部医学科の現役合格者数は 4 名に減少した。
エ キャリア教育の重視 【A】	① 学校外の機関や卒業生等からの支援等、外部人材を活用し、進学校としてのキャリア教育の充実を図る。 ② 進学指導重点校としてのミッションだけではなく、社会との接続（トランジション）を意識した見えない学力や見えにくい学力（コンピテンシー）の育成を図る。	① 卒業生の合格体験講演会や卒業した社会人からの講話により、将来へのモチベーションを涵養できた。 ② 知識・理解の向上だけではなく、学校行事や部活動を通じて、コミュニケーション能力や、コンピテンシーの育成を図った。

（４）生活指導

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア SNS の適切な利用促進に関する指導の徹底 【A】	① 望ましい生活習慣を確立する指導の一環として、生徒が意図せずにトラブルや犯罪に巻き込まれたり、他者を傷つけたりすることのないよう、全教職員があらゆる機会をとらえて「SNS 戸山ルール」の徹底を図る。	① セーフティ教室や様々な場面を通じて、SNS の正しい使い方や「SNS 戸山ルール」の徹底を図り、SNS によるトラブルは発生しなかった。
イ 体罰根絶といじめの事前防止・早期発見・早期対応の徹底 【A】	① いじめ・体罰に関するアンケートを年 3 回実施するとともに、特に部活動において顧問と外部指導員が連携して体罰や不適切な指導を根絶する体制を構築する。 ② アンケートの結果により、いじめが	① いじめ・体罰に関するアンケートを年 3 回実施し、記述内容によっては生徒からの聴き取りを実施した。気になる事例はなかった。 ② スクールカウンセラーとの綿密な打ち合わせ等により、生徒情報を共

	発覚した場合には、いじめ防止対策委員会を速やかに開催し、初動対応によって重大事案にならないようにスクールカウンセラーを含めた全教職員で組織的な対応を実施する。 ③ 気になる生徒については、些細なことでも見守りリスト等で情報を共有し、サインを見落とさないようにする。 ④ SOS の出し方について周知する。	有し、定期的な教育相談委員会を開催し、重大事案にならないような組織を確立できた。 ③ 長期休業前には見守りリストを更新し、校内で共有し、万が一の際の体制づくりを行った。 ④ 東京都教育委員会の資料を活用し、SOS の出し方について指導を行った。
ウ 戸山ならではの生活指導の充実 【A】	① 「自主自立」という名の丸投げや放任ではなく、見守る体制を取りながら、学校生活の充実に向け、生徒の規範意識や公共の精神の向上を図り、生徒自らルール作り等ができるように導いていく。	① 生徒部を中心に見守ることを原則に、適宜報告を求めながら必要に応じて助言する生徒指導を行った。

(5) 特別活動・部活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事を通した生徒の主体性の育成 【A】	① 本校の伝統である「自主自立」の精神を踏まえ、生徒が自ら課題を見つけ、自ら収集した情報をもとに自ら解決策を考え、自らの意志決定により、問題をよりよく解決していけるよう支援する。 ② 学校行事において、見通しをもって計画的に準備させることにより、質の確保と行事終了後は速やかに学習中心の生活に復帰できるよう指導し、授業や学業との両立を図る。 ③ 特別活動終了後は、必ず振り返りを行うとともに、Forms 等の活用によりアンケートを実施し速やかに次年度に向けた反省点を見出していく。 ④ 経営企画室と連携し、会計担当生徒を指導し適切な会計処理を実施する。	①② 生徒に自分で考えさせ、学校行事等の企画や運営等支援を行うことで、保護者に運動会や戸山祭を公開し、生徒会主催の学校説明会等を実施した。 ③ Teams や Forms 等を活用した振り返りを必ず行い、次年度に向けた課題を見出すことができた。 ④ 経営企画室と連携を図り、適切な会計管理・処理を実施した。

イ 部活動を通して健全育成 【A】	① 「部活動に関する活動方針」や文化部・運動部活動ガイドラインに基づき、全部活動が週二日以上完全休養日を設定するとともに、短時間で最大限の効果を上げる合理的な活動方法等を工夫することで、学習時間を確保する。 ② 勝利至上主義に陥ることなく、生徒の自主性を尊重した部活動の在り方を意識した指導を実施する。 ③ 部活動ごとに口座を開設し、部費を一元管理するとともに、通帳や会計報告等を定期的に管理職が確認することで、適正な部費の執行・管理を行う。 ④ 教職員の加重負担とならぬように、部活動支援員の活用と部活動の今後のあり方を働き方改革の面から検討する。	① ほぼ従前の部活動に近い、活動を実施することができた。ガイドラインに基づいた日数で効率よく部活動を行った。 ② 部活動の在り方については、クラブ管理局を中心に生徒自らその在り方を検討した。 ③ 部費や部活動に係る予算執行については、生徒任せにすることなく、顧問が適切に関わりながら管理し、通帳及び印鑑は管理職の適切な管理下により執行できた。 ④ 働き方改革を進めるため、部活動支援員の活動時間を増加し、教職員の負担を軽減することができた。
ウ 「TOKYO ACTIVE PLAN for students」を踏まえた体力向上 【A】	① 体育の授業や体育的行事、部活動の充実により体力テストの結果を向上させる。 ② 運動を楽しみながら、自らの体力を向上させる習慣を身に付けさせ、健康の保持・増進に対する意識を高める。	① 昨年度に引き続き、体育の授業中に体力向上に向けた取組みを実施した。 ② 生涯スポーツの観点から様々な種目を体験させ、体力向上だけでなく、スポーツに親しむ姿勢を育成した。

(6) 安心・安全な環境作り

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 心身の健康と安全に対する意識を高めた健全育成 【A】	① 地域と連携した総合防災訓練を行うことで、自助・共助の精神を培う。 ② 自転車使用に関する安全教育指導を行い、自転車通学者の保険の全員加入やヘルメット着用の指導を実施する。 ③ 「東京都特別支援教育推進計画（第二期）第二次実施計画」に基づき、発達障害等、特別な支援が必要な生徒に対して、合理的配慮に基づく適切な対応を実施するとともに、障害	① 新宿区や地元町内会、消防署等との連携により、1学年を中心として総合防災訓練を実施した。 ② 自転車使用に関しては、学年集会等を活用し、指導を行った。 ③ 特別な配慮を要する生徒に対しては、生徒・保護者の要望を聴き取り、合理的な配慮を行った。 ④ スクールカウンセラーと定期的な情報交換を行い、課題のある生徒の対応については、教育相談委員会等

	者への理解の促進を図る。 ④ スクールカウンセラーや養護教諭と連携を図り、定期的な教育相談委員会を実施することで、生徒のメンタル面でのサポートを行う。	を通じて全教職員で情報の共有化を図った。
イ 危機管理の徹底 【B】	① アレルギーや疾病のある生徒に関する情報を校内で共有し、危機管理に努める。 ② 生徒のメンタル面における小さなサインを見逃さず、迅速かつ組織的な対応を行う。 ③ 学校事故の未然防止（リスク・マネジメント）と事故初動対応の重要性を理解し、授業や部活動等の体育活動中の事故を未然に防止するとともに、万が一事故が発生した際には、速やかな報告・連絡・相談体制により、被害を最小限にとどめる。 ④ 児童相談所や警察等と連携し、家庭内での虐待が予想される生徒の安全を確保する。	① アレルギーや持病のある生徒に関する情報は職員会議等で全教職員に周知を図った ② 見守りリストを共有し、課題のある生徒については情報共有を教員間で綿密に行った。教育委員会から配布されたカード等を活用し、生徒にSOSの出し方について周知した。 ③ 教育相談員会において、小さなサインを発見した際の対応方法についての情報の共有を図った。 ④ 職員会議や服務事故防止研修等を通じて、平素からのリスク管理や事故発生時の迅速な対応及び情報の共有化の重要性を周知し、組織としての対応の仕方、報告・連絡・相談体制については徹底した。
ウ 生徒の変化を見逃さない体制の構築 【B】	① 担任やスクールカウンセラーによる全員面接の実施 ② コンディションレポートを活用した支援が必要な生徒の早期発見	① 5月中にはほぼ1学年の全員面接を終了し、6月には気になる生徒の個別面談を行った。 ② コンディションレポートについて生徒・保護者への周知が不十分で校内で活用できていない。
エ 保護者との良好な「顔の見える」関係づくり 【A】	① 保護者が安心して学校教育への参画できるよう、保護者会を中心とした情報の共有化を図る。 ② ホームページを活用した保護者向け情報の発信（パスワードをかけた保護者向け文書の掲載） ③ 大学進学に向けた不安を取り除くために3学年における三者面談の原則全員実施（1、2学年は任意とするが、企画並びに広報は実施する） ④ 戸山会（保護者会）との連携の充実	① 各学年年間3回、対面で保護者会を実施した。また、運動会、戸山祭等、保護者が生徒の様子を見る機会を設けた。 ② 生徒に配布した文書を中心にパスワードをつけてホームページに掲載した。 ③ 3学年の三者面談を夏季休業期間中に多くのクラスで全員実施した。 ④ 戸山会と各分掌主任及び学年主任の間で定期的に情報交換を行った。 ⑤ 学校評価アンケートの自由意見に

	⑤ 学校評価による保護者の意向の把握	より、保護者の意向を把握し、課題を改善した。
--	--------------------	------------------------

(7) 募集・広報活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 組織的な募集活動の充実 【A】	① 本校の特色や強みをデータで提示する等、わかりやすく中学生・保護者へアピールする。 ② 戦略的かつ効果的な募集活動を展開し、学校説明会、学校見学会だけでなく、出前授業や学習塾の出張説明会等積極的に広報活動を実施する。 ③ 私立高校を意識した学校案内の刷新や「都立高校 PR サイト」へのコンテンツ提供、「まなびゅー」や YouTube 等の動画の活用、学校紹介動画の作成等、イメージ戦略を整える。 ④ 学校説明会や学校見学会の広報活動は全校体制で、学校行事として経営企画室職員を含めた全教職員が必ず関わりをもつ。 ⑤	① 本校の特色がわかりやすいような資料「この 1 枚でわかる！戸山高校」を A 3 判 1 枚で作成し、説明会等で配布した。 ② 学習塾 7 校の対面による説明会に参加した。 ③ 生徒会による学校紹介ビデオを作成し、本校のホームページに掲載をした。 ④ 全校体制で学校説明会等の広報活動を実施した。感染症防止対策が不要になったため、オンライン・による説明会は実施しなかった。
イ ホームページを中心とした広報活動 【A】	① 学校情報を適宜ホームページ掲載等、広報活動を充実させる。 ② カウンター機能を重視し、アクセス件数を把握することで、中学生や保護者の動向を探る。 ③ 在校生やその保護者向けに、適切な内容を随時掲載する。	① ホームページのリニューアルにより、頻繁にコンテンツの更新を行った。 ② カウンター機能を利用し、アクセス件数を把握した。 ③ 本校の様子を極力掲載できるようにし、年間更新回数は、688 回以上、一日平均のアクセス件数は、4,500 件を超えた。

(8) 経営企画室体制

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 学校経営への参画 【A】	① 学校経営計画に基づき、学校経営に参画し、工夫を凝らした経営企画室運営を行う。 ② 教員と企画室職員が協働し、積極的な経営参画を図る。	①② 会計年度任用職員 3 名を含め、経営企画室全員体制による学校経営への参画により、スムーズな事務処理、適切な予算執行ができた。 ③ I C T を最大限活用し、電子起案

	③ 働き方改革の一環として「費用対効果」と「時間対効果」を意識し、ICTを最大限活用して業務を遂行する。 ④ 学校の総合窓口として思いやりの心と品格を重んじ、全校の機能をスムーズに調整する。 ⑤ 業務全般を理解するとともに、担当部署のスキルアップを図ると同時に課題意識を常にもち、組織的に業務改善を図っていく。 ⑥ 学校行事や保護者会活動等にも積極的に参画する。	率 100%を達成することができた。 ④ ワンストップサービスとして、経営企画室の窓口業務、電話対応について適切に実行できた。 ⑤ 業務改善を意識し、室長及びベテラン職員による若手採用職員の育成も適切に実行できた。 ⑥ 学校行事等にも、経営参画の一環として、参加出来た。
イ 適切な予算執行 【A】	① 計画的な予算執行により、円滑な学校運営と予算の有効活用と一般需用費におけるセンター執行率の向上を図る。 ② 教員との連携により、中長期的見通しに立った施設・設備・備品等の更新を図る。 ③ SSH や TM 等の特別予算を計画的かつ適正に予算執行する。 ④ 施設管理において委託業者と連携し、適切な運営を図る。	① 新型コロナウイルス感染防止対策による、緊急性のある予算執行もあったが、ほぼ予定通り進めることができた。 ② 中・長期的な視点に立った予算編成指針を策定したが、適切な予算執行を行うことができた。 ③ SSH や TM 等の特別予算を活用し、教育活動に必要な消耗品等を購入した。また、働き方改革の一環で職員室の整備事業の予算で多機能の印刷機を活用することができた。 ④ 委託業者との連携により、適切な運営を行えた。
ウ 関係団体との連携	① 保護者会（戸山会）との積極的な連携を図り、校務運営を支える。 ② 同窓会（城北会）と連携を図り、学校の適切な管理を行う。 ③	①② 戸山会及び城北会との連携により、卒業生講話や校務運営を適切に実行できた。また、城北会の在校生の予納金については、学校徴収金としての委任業務を切り離し、適切な関係へと整理できた。

2 重点目標と数値目標

達成数値状況調査

重点目標	具体的な数値目標（令和5・4年度達成数値）
学力向上（総合偏差値）	定点観測の11月のベネッセ模試 総合成績における総合偏差値 1年生 74以上 <u>65名</u> (R05 53名、R04 55名) 68以上 <u>198名</u> (R05 174名、R04 205名)

	60以上 <u>303名</u> (R05 297名、R04 299名) 2年生 74以上 <u>20名</u> (R05 30名、R04 20名) 68以上 <u>101名</u> (R05 115名、R04 183名) 60以上 <u>237名</u> (R05 238名、R04 213名)
進学指導重点校としての進学実績	① 大学入学共通テスト6教科以上受験者 (R05 以前は5教科以上の数字) <u>272名</u> (R05 284名、R04 284名) ② 同上850点 (約85%) 以上 <u>73名</u> (R05 52名、R04 39名) ③ 東京大学現役合格者 <u>8名</u> (R05 8名、R04 7名) ④ 難関国公立大学 (東大・京大・東工大・一橋大・国公立大医学部医学科) 現役合格者 <u>47名</u> (R05 46名、R04 34名) ⑤ 国公立大学現役合格者 <u>145名</u> (R05 136名、R04 120名) ⑥ 国公立大学医学部医学科現役合格者 <u>4名</u> (R05 10名、R04 8名) ⑦ 早慶上理現役合格者 <u>289名</u> (R05 211名、R04 192名)
募集対策の充実	① 学校説明会 (10・11月) の参加者 <u>1,158名</u> (R05 1,660名、R04 2,625名) ② 応募倍率 (推薦選抜) <u>3.55倍</u> (R05 3.34倍、R04 3.68倍) ③ (学力選抜) <u>2.09倍</u> (R05 1.98倍、R04 1.94倍)
SSH 第Ⅳ期指定校としてのSSH事業の充実	① 科学の甲子園等のコンテスト、研究発表会入賞者数 <u>32名</u> (R05 23名、R04 32名) ② 生徒の英語での研究発表 <u>43件</u> (R05 23件、R04 17件) ③ 授業公開、地域向け講演会、研究発表会の開催回数 <u>5回</u> (R05 9回、R04 11回) ④ SSH クラス以外の生徒向け理数講演会、教科融合型の講義、ワークショップ等の開催 <u>10回</u> (R05 6回、R04 13回) ⑤ 小・中学生向けの理科実験教室の開催 <u>6回</u> (R05 7回、R04 10回) ⑥ 理科教員向けの理科研修会の開催 <u>0回</u> (R05 0回、R04 2回) ⑦ 本校が主催するS Y R s (理系女子交流会) の発表校数と発表者 <u>2校 4名</u> (R05 4校19名、R04 4校11名) ⑧ 本校で開催するT S S (生徒研究成果合同発表会) の発表校数と参加者数 <u>15校254名</u> (R05 12校255名、R04 18校351名)
Tokyo スマートスクールプロジェクト並びに「東京型教育モデル」の実現	① 暗記中心、チョーク&トークのパッシブな授業形態や過去の成功体験からの脱却した主体的・対話的で深い学びの授業実践 全教職員による実施 <u>100%</u> ② 校内Wi-Fiを活用したICTによる全教職員による授業実践 <u>100%</u> ③ 全教職員によるOffice365の活用実践 <u>100%</u>

3 次年度に向けた課題と対応策

進学指導重点校として、東大現役合格8名を含む難関国公立大学現役合格合計46名は、過去最高であった昨年度の34名を12名上回り、大きな成果を挙げることができた。また、国公立大学現役合格者数も昨年の120名台から136名と一昨年並みに回復し、進路部を中心とした学習指導や進学指導

が一定の成果を収めたといえる。引き続き、校内の連携を強化しながら、生徒の希望進路の実現を図る。

本校の特色であるSSH活動は、海外から本校を訪れる高校も増え、本校もフランス海外研修旅行を実施できた。今年度はSSHの第Ⅴ期申請の年であったが、残念ながら本校の研究計画は採択されなかった。これから2年間で第Ⅳ期を継続しながら、第Ⅴ期申請に向けた準備を行う。中学生や保護者も本校のSSHに関心が高く、20年間築き上げてきたSSHの取組を失うことは、本校にとっても、東京都にとっても、本校に進学してSSHで学びたいと考えている中学生にとっても大きな損失である。

東京都教育委員会や同窓会等の御支援を受けながら、本事業を継続していく。

TM事業においては、都立病院や大学で見学や体験の機会を得ることができ、生徒のモチベーションを高めることができた。キャリア教育だけでなく学習指導にも力を入れたことにより、国公立大学等の医学部現役合格者が昨年度の8名から今年度は過去最高の10名となった。

2学年まで観点別評価が導入されたが、3観点の評価と5段階の評定、観点の評価バランスやルーブリック評価の基準については検討の必要がある。

また、スマートスクール構想に基づき、一人1台端末の整備が進んでいるが、校内では道具として活用する意欲とスキルが未だ不十分である。成績処理においても、定期考査の採点や分析、観点別評価を行う際、便利なRealtendantの一層の活用を図るなど道具としてICTを活用する雰囲気在校内に醸成する必要がある。来年度もICTを活用した働き方改革を推進する。

授業については、チョーク&トークの一方通行の授業を行っている教員がいる。単に知識を問う問題ではなく、考えさせる問題を投げかけ、生徒同士の協議の時間をとるなど、生徒の活動時間を増やし、主体的で対話的で深い学びを目指す。

教育課程については、SSHクラスの「情報Ⅰ」の「SSI」・「SSⅡ」による代替、現行1単位設置の「地学基礎」、「知の探究Ⅰ」と「知の探究Ⅱ」の接続等、解決すべき課題があり、来年度も継続して審議を行っていく。